

魚類防疫に関する技術指導と研究

(魚介類安全対策事業)

古谷尚大・清川智之・松本洋典・沖 真徳・岡本 満・福井克也

1. 研究目的

海面及び内水面の魚病被害軽減と魚病のまん延防止のため、魚病検査や水産用医薬品の適正使用の指導及び養魚指導・相談を行う。

2. 研究方法

種苗生産、中間育成、養殖場等の生産施設を巡回し、疾病の対処法や飼育方法の指導・助言を行うとともに、各生産施設や天然水域における疾病発生時には現地調査、魚病検査により診断を行った。検査方法は、主に外観および解剖による肉眼観察、検鏡観察、細菌分離、PCR 検査等により行った。細菌が分離された場合は、対処法および水産用医薬品の適正使用について指導を行った。

モニタリング調査として、ヒラメのクドア属粘液胞子虫症 (*Kudoa septempunctata*)、コイヘルペスウイルス (KHV) 病について、農林水産省ガイドラインおよび水産庁が作成した防止対策等に従って PCR による定期的な保菌検査を実施した。さらに、ヒラメのシュードモナス症について、種苗生産施設および中間育成施設において PCR による定期的な保菌検査を行った。

なお、KHV 病の養殖業者の定期検査については、令和元年7月以降は未発生水域のみを対象として行うこととしたため、今年度の検査はなかった。アユの冷水病およびエドワジエラ・イクタルリ症対策については、県外産種苗放流情報の収集と県内産人工種苗の保菌検査を実施した。

3. 結果

(1) 疾病発生状況

今年度の魚病診断件数は、海面2件、内水面3件の計5件であった。概要は次の通りである。

海面では、放流用種苗として山口県から入手し、中間育成されているアカアマダイ種苗の体表にびらんがみられた。検鏡したところ、患部に長桿菌が確認されたことから滑走細菌症と診断した。また、クロマグロ蓄養魚に斃死が認められたため、解剖して観察したところ、鰓、幽門垂、胃の内壁に大量のディディモゾーンの寄生が確認された。本虫による死亡事例は少なく、寄生がみられた個体の半数の胃に

未消化の餌が残存していたことから、寄生虫による斃死ではなく、衝突等による事故が疑われた。

内水面では、江津市のアユ種苗生産施設で中間育成中の水槽において7月～8月にかけて斃死がみられ、いずれも原因は異型細胞性鰓病 (PCR 検査で陽性) であった。長時間塩水浴を繰り返すことで終息したが、累積死亡率は50%に及んだ。

7月上旬～8月上旬にかけて川本町のアユ中間育成施設でも累積死亡率約15%となる斃死がみられ、(国研)水産研究・教育機構 水産技術研究所病理部の不明病診断により冷水病と診断された。

雲南市の河川に連絡する小水路において複数のコイの死骸が確認され、PCR 法による KHV 検査のほか、細菌培養法による検査を実施した。いずれも陰性で、原因が疾病によるものとは判断できなかった。

(2) モニタリング調査

ヒラメの県内の種苗生産、中間育成施設を対象に種苗搬出前(3月)および放流前(5月)において実施した PCR による保菌検査で、クドア症(計85検体)、シュードモナス症(計59検体)ともに全て陰性であることを確認した。

アユの冷水病およびエドワジエラ・イクタルリ症の保菌検査(36件1,080尾)では、全て陰性であることを確認した。

なお、疾病発生・診断状況の詳細については添付資料に詳細を記載した。